

書評

Me 世代と公共精神

浅沼 信爾
一橋大学客員教授

Robert D. Putnam & Shaylyn Romney Garrett, *The Upswing: How America Came Together A Century Ago and How We Can Do It Again*, 2020, Simon & Schuster.

今世間で議論されている問題の一つは社会の分断だ。それが国家社会でも国際社会でも顕著になってきて、どのレベルでも社会を社会として結束させる精神・思想・規範等々が希薄になり、社会の発展と存続の障害になっているという議論をよく聞く。社会の構成員の多くが「Me 世代」といわれるように社会全体の福祉に関心を示さず、自身の利益を重視するいわば自己中心的になると社会の不平等や格差が改善されず、社会の分断が起こる。

17 世紀のイギリス詩人ジョン・ドンを引用するまでもなく「誰も孤島ではいられない」わけで、人は社会との繋がりの中で生きている。¹ しかし、その繋がり方は多面的でかつ多様だ。個人と社会の関係で、個人の社会に対する貢献や義務を重視するか、あるいは社会に対する権利の主張や私益の追求に重点を置くかによって、その人の生活規範は変わってくる。それは、職業選択や社会活動、あるいは市民活動に現れてくる。

20 世紀の後半から今日にかけて、自己中心的ないわゆる「Me 世代」が社会の主流になり、その時代精神が今の社会現象に反映されているという論者が多くなった。差別や格差が糾弾されるべきなのは当然だが、過激な社会に対する権利の要求はともすると社会を分断させ、究極的には社会をカオス（混沌）状態へと導く。²

ロバート・パトナムは、『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』（2000 年）でアメリカの社会資本の減退を論じた有名な現代アメリカ社会政治学の泰斗で、最近も『われらの子ども：米国における機会格差の拡大』で、アメリカで増大する不平等と格差を論じており、後者はこのコラムでも紹介された（第 19 号、2005 年 8 月）。³ パ

¹ John Donne, “No man is an island, entire of itself; every man is a piece of the continent, a part of the main...”

² 個人の自由と社会と社会に規制を課する権威の三者の関係を歴史に則って論じた最近の研究に、Daron Acemoglu and James A. Robinson, *The Narrow Corridor: States, Societies, and the Fate of Liberty*, 2019, Penguin Press（ダロン・アセモグル、ジェイムス・A・ロビンソン（著）、桜井裕子（訳）『自由の命運：国家、社会、そして狭い廻廊（上・下）』2020 年、早川書房）がある。個人の自由は、権威主義的な統治と無政府状態のカオスの中間に存在し、バランスが崩れると個人の自由が失われるという理論的な歴史研究だ。

³ Robert D. Putnam, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, 2000, Simon & Schuster（ロバート・パトナム著、柴内康文訳『孤独なボウ

トナムは『われらの子ども』を彼の長い研究生生活の最後の著書と考えていたが、その後「Me 世代」の台頭が顕著になってきてその行方が気に懸かり、ロムニー・ギャレットの手助けを得て本書を完成させたと述懐している。

パトナムが本書で展開した議論の大筋は次のようだ。個人的利益の追求と社会に対する貢献を重視する公共精神のどちらが大きいかを数値化して、「Me 社会」と「We 社会」を定義すると、1890 年頃は Me 社会の傾向が顕著で、徐々に We 社会に変容してピークに達したのがちょうど 1960 年代だ。⁴ それからアメリカ社会は逆に Me 社会的傾向が強くなって今日に至っている。

現在の状況は 1890 年代にそっくりだ。1890 年代は「金ぴか時代 (Gilded Age)」と呼ばれる南北戦争後の経済発展の最盛期で、アメリカ経済の西部への拡大と技術進歩によって物質的には豊穡の時代であったが、同時に社会的にも政治的にも分断が顕著だった。それから 1960 年までの間には、第一次世界大戦と世界大不況、第二次世界大戦と戦後復興、ベトナム戦争と市民権運動があり、この間にアメリカの教育制度、労働運動の盛り上がり、独占禁止法の制定等々の福祉国家制度の基礎が築かれた。We 社会のほうに強く働く力があったのだ。

しかし、1960 年代のピークを過ぎてから、今度は Me 社会への逆行が始まり、今日に至っている。1980 年代には「小さな政府」を標語とする新自由主義的政策がアメリカの政治・経済・社会政策の規範となったかのように思えたが、それもこの Me 社会への傾斜の反映だ。(パトナムは 1980 年代のレーガン・サッチャーの新自由主義が Me 社会を創り出したのではなく、むしろ Me 社会の出現がレーガン・サッチャー主義という政治表現になったのだ、と論じている。)

パトナムは、今の Me 社会への傾斜が強まると社会から共同体への貢献に価値を見出す公共精神が薄れ、政治・経済・社会そして究極的には文化までがカオスに向かうと考えている。しかし将来に対して希望が持てないわけではない。1890 年代にも同じような状況に陥ったことがあるが、それからの半世紀には公共精神の復活があったことだ(本書のタイトル、Upswing (上振れ) はここから来ている)。今もまた当時の公共精神を取り戻すこと、すなわち We 社会の再現は十分可能なことだ。しかしわれわれが今日まで苦勞して獲得してきた個人の自由を失わずに、今一度共同体価値を回復させるのは大いなるチャレンジだとパトナムは結論づけている。

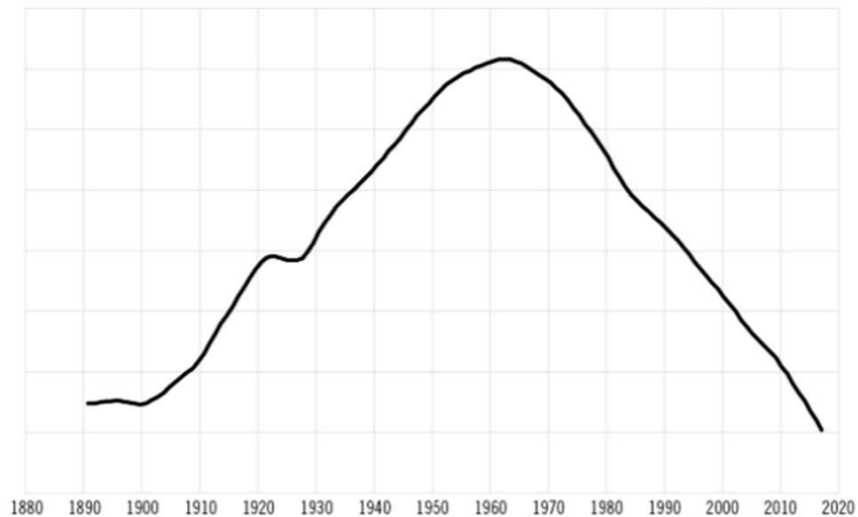
この結論を導くためにパトナムが使った手法は、政治・経済・社会・文化のすべての面にわたる細かい聞き取り調査とあらゆる可能な指標の収集と分析という「彼のいつもの」

リング：『米国コミュニティの崩壊と再生』、2006 年、柏書房); Robert D. Putnam, *Our Kids: The American Dream in Crisis*, 2015, Simon & Schuster (ロバート・パトナム著、柴内康文訳、『われらの子ども：米国における機会格差の拡大』、2017 年、創元社)

⁴ 本書ではパトナムは、“We” society, “I” society という言葉を使っている。

分析方法だ。ちなみにここに挿入した「共同体対個人主義、1890年から2017年」と題された図の曲線は、経済、政治、社会、文化を数値化した傾向線を複合したもので、またそれらの部分もいくつもの傾向線を複合したものになっている。曲線の上昇は、社会の個人主義的傾向に比較して公共精神が強くなっていることを示し、逆に下降線は個人主義的傾向が強くなっていることを示している。⁵

公共精神対自己中心主義の総合指標



いつものようにパトナムの社会現象の観察データは広範で、分析の手法も妥当で、そこから導き出すナラティブは面白い。Me社会とWe社会といった極めて抽象的な曖昧な概念を豊富なデータの整理から肉付けして、そこから意味のある結論を得るという手法はさすがだ。この本の魅力の一つと言ってよいと思うが、読み進むうちにアメリカ社会に起こったいろいろの紛争や戦争、あるいは景気変動や大不況などの事象が出てきて、それが時代的精神（いわゆるツァイトガイスト）とも呼べるMe社会やWe社会にどのように関わっていたのか、因果関係はどうなっていたのか、いろいろと疑問が湧いてくる。政治・経済・社会・文化といった広範な分野をカバーしてそれらの問題をすんなりと解き明かしてくれるようなメタ・マクロの社会変動理論は存在しないだろうから、自分で考えるよりほかはない。ただ、パトナム自身はどうも社会の基本的な動因は経済でも政治でもなく、時代精神が先行するようだと感じている節がある。しかしその時代精神そのものがどのように形成されるかについては理論めいたものは提示していない。今日の社会学者の多くが信じている経済的な環境が政治や社会、そして時代精神を形づくと考えるマルクシズムの真反対だ。

さらに読者自身の想像力と思考に任されているのは、Me社会現象はアメリカだけでなく、その他の西欧諸国で、あるいは経済的に成熟しつつあるほとんどの国で起こってい

⁵ 本書 p.13 参照。

ることなのかと言う疑問だ。”I, Me, Mine...”と歌ったのはイギリス人のビートルズだし、独り住まいの「ワンルーム・アパートの思想」と評された村上春樹は 20 世紀後半に日本に現れた作家だ。わたくしは、(半分冗談で) 日本の経済・社会現象は、それが鉄鋼や自動車の生産でもあるいは「性の革命」のような社会現象でも、「日本=1/2 (アメリカ-15年)」という公式で解釈できると主張していたことがある。アメリカで起こったことはだいたい 15 年程度の遅れで日本に起こる。1/2 はアメリカと日本の人口比とも、程度問題といったあいまいなスケール・ファクターだと考えれば良い。時代精神がMe 社会現象の動因だとすれば、このグローバリゼーションの時代にアメリカ発の時代精神が他の国々に伝播しないはずはない。それがどのように現れているか、どのような影響を政治・経済・社会・文化に与えているかは、読者自身が考える問題として残されている。

Me 社会が想像の産物と言われる国民国家や国際的なあるいは地域的な共同体をカオスに導いているという怖れが論議される今、われわれそれぞれが抱いている政治・経済・社会・文化の諸問題を考えたり議論したりする際に下敷きとして使用するのに絶好の本だ。是非、一読をお勧めしたい。